

「宿業」の思想的意義についての一考察

藤 元 雅 文

はじめに

『歎異抄』第一三章における「宿業」という言葉は、真宗における人間観を示すものとして、多くの先達がその意義を確かめてきた。また、一方で宿業という表現に関して、人間が作り出す社会的差別構造を助長する理解と使用が重ねられてきたにもかかわらず、その差別性に気づかず、またその事実を忘却していくことに対する批判が繰り返されてきたという事実がある⁽¹⁾。このようにその意義が既に様々に究明され、また問題が指摘されてきた宿業をテーマとして取り上げる理由は、改めて次の点からその思想的意義を考察したいと考えるからである。それは、本願念仏の教えを明らかにする聖教あるいは法語のなかで、『歎異抄』以前の宿業の意義を確かめ、その意義内容との連関において、『歎異抄』における「宿業」の思想的意義を考察したいということである。具体的には、善導の『観経疏』および親鸞の師・源空の法語、また親鸞が「よきひと⁽²⁾」と仰ぐ聖覚・隆寛における「宿業」「宿善」への言及を柱に考察を進めていくことにする⁽³⁾。このことを通して、『歎異抄』における「宿業」を理解する時の基本的視座を明確にし、『歎異抄』における「宿業」の究明が、私たちにどのような人間のあり方と課題性とを迫るものなのか、考えて

いきたい。

一、『観経疏』「序分義」における宿業の意義

「浄土三部経」およびその意義をあきらかにする七祖の著作において、宿業という言葉が現れる嚆矢は、善導の『観経疏』「序分義」である。⁽⁴⁾『観経』序分・厭苦縁において、実子・阿闍世に幽閉され、愁いに沈む韋提希は、彼女の前に思いがけず現れる釈尊に、次のように問う。

白言世尊我宿何罪生此惡子 世尊復有何等因縁与提婆達多共為眷屬

〔真宗聖教全書〕（以下『真聖全』）一 五〇頁

この第一の問いの意義を明らかにする『観経疏』の文中に宿業という言葉があらわれる。少し長くなるが、その前後の文章を含めて、引用する。

「白仏」と言う已下、此れ夫人婉轉涕哭すること量久しく少しき惺めて始めて身の威儀を正しくして合掌して仏に白すことを明す。我一生よりこのかた、未だ曾て其の大罪を造らず、未審し、宿業の因縁、何の殃咎有りて而も此の兒と共に母子たる。此れ夫人既に自ら障深くして宿因を識らず、今兒の害を被むる、是横に來れりと謂うて、願わくは仏の慈悲、我に徑路を示したまえと云うことを明す。

〔定本親鸞聖人全集〕（以下『定親全』）第九卷 加點篇3 八一頁 原漢文⁽⁵⁾

『観経』の「世尊、我宿（むかし）何の罪ありてか、この惡子を生める」という韋提希の言葉は、阿闍世との「宿業の因縁」を釈尊に問うものだと善導は注釈している。善導によれば、韋提希に阿闍世との「宿業の因縁」を問わせるものは、「我一生よりこのかた、未だ曾て其の大罪を造らず」という韋提希の自己認識である。この自己認識が「未審し、宿業の因縁、何の殃咎有りて」と、宿世にどのような殃咎（つみ・とが）があつて、惡子・阿闍世を生み、

母子の関係となったのかを問うのである。さらに善導は、ここでの韋提希のころを「今兒の害を被むる、是横に來れりと謂う」とおさえている。これは、母である自身に逆心を起し、その結果自分を幽閉した「悪子」からの危害は、現世の自身の業にその因はなく、「横に」つまり不条理にも子・阿闍世の反逆に遭ったのだという韋提希の思いを明示している。その上で、「願わくは仏の慈悲、我に徑路を示したまえ」と、宿因を知ることができない障り深い私に、仏の慈悲によつて、なぜこのようにわれのない不条理な出来事が起こるのか、その筋道を示してくださいと願うのである。善導はこのように韋提希の問いの内実を明かしている。

善導によるこの注釈において課題となるのは、『觀經』序分における韋提希への阿闍世の行為は、「宿業の因縁」に基づくものであると善導自身が理解していたかどうかである。これについては古來解釈が分かれているが、まず確かめるべきは、『觀經疏』の文脈そのものである。というのは、善導は既に『觀經疏』禁父縁における注釈の中で阿闍世の出生にかかわる「昔日の因縁」を明記している。そこで頻婆娑羅王の「計はかりごとを可よ」として阿闍世が生まれる時、高樓から生み落とし殺そうとした韋提希の業を善導は明瞭におさえる。この明確なおさえからして、「一生よりこのかた、未だ曾て其の大罪を造らず」という韋提希の自己認識そのものが問われねばならず、自己の罪惡の事実を自覚できないという課題性の只中で、韋提希は「宿業の因縁」を問うているという視点に立つて、善導の注釈を理解するべきであると拙論では考えたい。

およそ「不条理」だと感ずる出来事に直面する人間は、怒り、怨み、不安、憎悪など苦しみのなかで、その出来事の原因を探しとめようとする。その原因を自らの「一生」に見出すことができず、このような不条理や苦しみをまねく因は自分自身の今生の「業」には存在しないという意識に立つて、「宿業の因縁」が問われる。まずはそのような韋提希の問いを理解することができる。一方、宿業とは、その語義をおさえるならば、宿世（過去世）につくった身口意の業ということになるが、善導の注釈に示唆されているように、「宿業」とは、自己意識が経験・認識してい

ない（「我一生よりこのかた、未だ曾て其の大罪を造らず」けれども、今ここに生きる私のあり方を生じさせる業のはたらき（「宿業の因縁、何の殃咎有りて而も此の児と共に母子たる」）ということになる。従って、「宿業の因縁」を問うとは、今この私にとっては、そもそも不可知なる質の事柄を問うことを含意しており、その不可知であることを問わざるを得ないところに、「宿業」における問いの重要な契機が存在している。まただからこそ「宿業を問う」視座の明確化が決定的な課題となるのである。以下、この点について少しく考えたい。

『観経疏』の文脈から見ると、韋提希における「宿業の問い」は自身の罪業の事実気づかないまま、自身が出遭う不条理と感じる出来事の因を、今生の「外」に求めようとする意識による「問い」であった。このような意識に立つて、宿業が問われるとき、人は宿業という言葉で「隠れ蓑」にして、現在の自己を正当化する課題性と無関係ではいられない。畢竟、このように宿業を問う視座の中にいるかぎり、人は自己のすがたに気づくことができず、自己を見失いつづけていくしかないといつていいであろう。

一方で、そのような宿業を問う意識の課題性を明確に自覚し、自己自身の罪悪を徹底して明らかにするところから、自己意識が認識する「外」でありつつ、今ここにいる我にはたらいっている因縁、つまり「宿業の因縁」を問うところに、「宿業の問い」は、ひるがえって、意識の閉鎖性を破るはたらきを有する問いとなる。つまり、自己自身の罪悪とも、現在の生における自身のあり方とも徹底して向き合うことなく、いわば自己意識の「隠れ蓑」として宿業を問うているのか、そのような「宿業の問い」が有する課題を自覚した上で、なお問われなくてはならない「宿業の問い」であるのかという、その視座の明確化が決定的に重要なのである。『観経疏』における宿業への言及が私たちに迫るこの視座の明確化は、宿業の思想的意義を明らかにする上でまず確かめられなければならない不可欠な契機であると考える。

以上、『観経疏』が示唆する「宿業」を問う視座の明確化について述べてきた。次に善導においては「宿業」と本

願の教えとの関わりについては言及されていないが、源空における宿業への言及を通して、その点について考察していききたい。

二、源空における宿業の意義

ここでは、源空における宿業の意義について確かめていく。源空の遺文については、その真蹟がごくわずかであり、源空の言葉がどのように書きとめられたのか、あるいは書写、編纂されていたのか等、基礎的事柄を含め、史料の限界から明確にしえないことが多く存在する。拙論では、いわゆる「伝記類」を除いた源空の遺文の中で、宿業という表現そのものが現れる『浄土宗略抄』（和語燈録）所収 および『念仏往生義』（拾遺和語燈録）所収）の二つの法語から、源空における宿業の意義を考察していく。

まず、宿業に関する二つの遺文の意味を概観しておきたい。

『浄土宗略抄』は、その奥書に「本にいはく、この書はかまくらの二位の禪尼の請によて、しるし進ぜらるゝ書也⁽¹⁰⁾」と記され、聖道・浄土二門と浄土門における安心・起行を中心に「専修念仏」の仏道の要点が著された書である。この書の終わりの部分で、称名念仏における現世の功德・利益として諸仏・諸菩薩による「護念」の内容が展開されていく箇所⁽¹¹⁾で、次の文が述べられる。

又宿業かぎりありて、うくべからんやまひは、いかなるもろものほとけ・かみにいのるとも、それによるまじき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものぶる事あらば、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。いはんや、又佛の御ちからは、念佛を信ずるものをば、轉重輕受といひて、宿業かぎりありて、おもくうくべきやまひを、かろくうけさせ給ふ。いはんや、非業をはらひ給はん事ましまさらんや。されば念佛を信ずる人は、たとひいかなるやまひをうくれども、みなこれ宿業也。これよりもおもくこそうくべきに、ほとけの御ちからに

て、これほどもうくるなりとこそは申す事なれ。

〔浄土真宗聖典全書〕（以下『浄真全』）六 四九一—二頁

ここでは「宿業かぎりありて」つまり宿業の定まりがあつてかかるであろう病は、どのような仏や神に祈ろうとも、無くなることはなく、もしそのような祈りによって病が治り、寿命が延びるようなことがあれば一人として病に苦しみ、また死す人はいなくなるだろうと述べている。その上で、本願を信ずる念仏者には「転重軽受」¹¹、つまり「宿業の定まりがあつて、重く受ける病を転じて、軽く受けさせる仏のはたらき」が成り立つことを教示している。さらにその「転重軽受」の具体相を、たとえどのような病にかかたとしても、みな宿業にに応じてのことであり、これ以上に重く受けるはずのものを仏の御力でこれほど軽く受けるのであると明らかにしていく。このように源空は、念仏を信ずる人は「転重軽受」の仏力の中を生きる故に、どのような病をも「宿業」と引き受けつつ（たとひいかなるやまひをうくれども、みなこれ宿業也）その中を生き抜いていく力をたまわること（ほとけの御ちからにて、これほどもうくるなり）を教示するのである。

次に、『念仏往生義』における「宿業」への言及箇所を概観する。

『念仏往生義』は、念仏を修す者の「うたがひ」を三種あげ、懇切に念仏往生に疑いなきことを明らかにする著作である。「念佛すとも世間のいとなみひまなければ、往生すべからず」という疑い、また「念佛すれども心猛利ならざれば、往生すべからず」¹³という疑いにこたえていく中で、念仏に具する三心の有り様を明らかにする結びの箇所に次の言葉が述べられる。

三心といへるは、名は各別なるに、たれども、詮ずるところは、たゞ一向専念といへる事あり。一すぢに彌陀をたのみ念佛を修して、餘の事をまじへざる也。そのゆへは、壽命の長短といひ、果報の深淺といひ、宿業にこたへたる事をしらずして、いたづらに佛・神にいのらんよりも、一すぢに彌陀をたのみてふた心なければ、不定業をば彌陀も轉じ給へり、決定業をば來迎し給ふべし。

〔浄真全〕六 六五三頁

ここでは先の二つの疑いに對し、念仏に具する三心とは「一向專念」と言いうるのであるとおさえ、「一向專念」とは、一すじに弥陀をたのみ念仏して余行をまじえないことだと示す。その理由として、寿命の長短や、苦樂等の果報の境遇に深淺の違いがあるのは宿業に應じて起こるのであり、そのことを知らないままいたずらに仏や神に祈るのではなく、一すじに弥陀をたのみ二心なければ、阿弥陀仏は不定業を轉じなさり、決定業、つまり專修念仏のものに來迎なさるのである。源空はこのように述べて、世間のいとなみのため暇なきものも、また心に常に猛利の心なきものも、余行をまじえず、ただ一すじに弥陀をたのみ念仏することを勧め、弥陀の本願である念仏往生に疑いないことを確言するのである。

以上、二つの法語の意義を粗々と尋ねたが、源空における宿業への言及について、その思想的意義を少しく考察したい。

源空は、(治癒が難しい)病、寿命の長短、苦樂等の果報の深淺は、「宿業かぎりありて」あるいは「宿業にこたへたる」と述べるように、今生の業を超えてはたらく「宿業」にかかわることであるという。今生を安穩に生きたいという思いの中で、治癒しがたい病、寿命の終わり、様々な苦悩の境遇に出遭うとき、その苦しみがなくなることを私たちは仏神に祈ろうとする。二つの法語において源空は、宿業に言及しながら、同時に仏神への祈りにふれ、それが「いたずら」つまり役に立たないと言わざるを得ないのだと明言する。それは私たちが如何ともしがたい苦境の中で、仏神に祈る「いたずら」な心がいかに深いかを参照するものでもあろう。しかし、そのような深い「いたずら」な心を有する私たちだからこそ、源空は本願をたのみ、信ずることを慫慂に勧めている。つまり本願念仏の教えとは、阿弥陀仏の「転重輕受」の力の中に「宿業かぎりありて」生きる身であることを自覚しつつ、どのような境遇をも受け止め、生き抜いていくあり方を開くものであることを説き明かすのである。このように源空において宿業は、人間の生の嚴肅なあり方を、たとえどれほど切実に仏神に祈ろうとも、いかんともしがたい身を生きる者として明示しつつ、

そのような存在であるからこそ専修念仏の教えに出遇うことの意義の大きさを明らかにする契機となる言葉だといえよう。

以上のように、源空は宿業と本願の教えとの関わりについて明らかにする。では、源空を師とする聖覚・隆寛は、この点についてどのような論を展開していくのか、次に見ていきたい。

三、聖覚・隆寛における宿業・宿善の意義

では、次に聖覚の『唯信鈔』における「宿業」の意義について見ていきたい。『唯信鈔』は、聖覚五五歳の時、承久三年（一二三二）、八月十四日に書き終えられたことが親鸞書写の『唯信鈔』奥書¹⁴によって知られる。この書は、師源空の教え、とくにその主著『選択本願念仏集』に相応する内容を有しながら、専修念仏の教えの要を仮名書きで簡潔に記した著作である。この書に宿業という表現が記されるのは、「五逆往生」に関わる次の問答においてである。

つぎにまた人のいはく、五逆の罪人、十念によりて往生すといふは、宿善によるなり。われら宿善をそなえたらむことかたし、いかでか往生することをえむやと。

これまた、痴闇にまどえるゆへに、いたづらにこのうたがひをなす。そのゆへは、宿善のあつきものは、今生も善根を修し悪業をおそる。宿善すくなきものは、今生に悪業をこのみ善根をつくらず。宿業の善悪は、今生のありさまにてあきらかにしりぬべし。しかるに、善心なし。はかりしりぬ、宿善すくなしといふことを。われら、罪業おもしといふとも、五逆おばつくらず。善根すくなしといふども、ふかく本願を信ぜり。逆者の十念すら宿善によるなり、いはむや、尽形の称念むしろ宿善によらざらむや。なにのゆへにか、逆者の十念おば宿善とおもひ、われらが一生の称念おば宿善あさしとおもふべきや。…（以下略）

〔定観全〕第六卷写伝篇2 六六一―七頁

ここでの問いは、『観経』下下品に説かれる五逆の者が十念によつて往生するのは宿善によるのであり、宿善を具

えていることが難しいわれらは往生できないのではないかというものである。この問いに対する聖覚の応答は非常に厳しい表現でなされるが、要点のみおさえるならば、五逆者の十念が宿善によるとするならば、五逆をつくらない者の、一生を通しての念仏があさしい宿善となるはずはないということである。この中で聖覚は宿業の善悪は「今生のありさま」によって明らかにすることができるという。つまり善心すなわち仏道を歩む清浄なる心がないという今生の事実によつて、宿善が少ないことをはっきりと知るべきなのであると述べる。さらにこれを踏まえ「われら、罪業おもし」と明言したうえで、そのわれらに対し誓われた本願念仏の教えに出遇うことのできた「宿善」こそ心にとどめるべきであると展開する。この聖覚における宿業と念仏の教えへの言及は、五逆の有無、宿善のあつさ、少なさは念仏往生の道においては問題とはならないのであり、そのことを知らずに「逆者の十念おば宿善とおもひ、われらが一生の称念おば宿善あさしとおもふ」ことこそ、いたずらな問いであると厳しく批判するのである。

この『唯信鈔』における「宿業」・「宿善」理解に思想的に連なる法語として、もう一つ確かめておきたい言葉がある。それは、親鸞が聖覚とともに「よきひとく」と仰ぐ隆寛の著作である『極楽浄土宗義』の文である。この書は隆寛七三歳、承久二年（一二二〇）の撰述であり、先ほどの『唯信鈔』より一年早く著されたものと考えられる。三巻本であるが、中巻、下巻が伝えられ、現在上巻は失われており、見ることはできない。

『極楽浄土宗義』巻中のテーマは「往生の機」であり、その冒頭には「一には報土往生の機、二には辺地往生の機なり」と記される。巻中全体が、この往生の二機の内幕を明かす巻であるが、次の文は「報土往生の機」に関する問答の中で述べられている。

問ふ、本土往生の人に就て宿善の有無を論ずべきや。答ふ、一宗の意は論ぜざるなり。問ふ、聖道浄土其の談異なりと雖も、宿善の有無においては皆以て一同なるべし。是の故に大経に云く、もし人善本無ければ此の経を聞くことを得ず、宿世に諸仏を見るもの即ち能く此の事を信ず。此等の文理、如何が和会すべきや。答ふ、聖道教

とは自力得脱の故に宿善無きものは、信ぜず、行ぜず。もし信無し、行無きものは惑を断ぜず、理を証せざるなり。浄土宗は偏に弥陀の願力に乗じて来迎を蒙むる時、無生忍を得、報土の境に入る。是の故に一宗の正意は、宿善を以て要とせず。：（以下略）

〔隆寛律師全集〕第一卷 九二―三頁 原漢文⁽¹⁷⁾

ここでは、本土（「辺地」）の対、「報土」をあわらす言葉）往生の人について、宿善の有無を論ずべきであるかという問いに対し、浄土宗の意においては宿善の有無を論じる必要はなく、問題とならないと端的に答えており、非常に重要な確かめがまづなされている。さらに問いが続き、聖道と浄土の違いはあるが、宿善の有無においては同一のほずであり、『大経』の「もし人善本無ければ此の経を聞くことを得ず、宿世に諸仏を見るもの即ち能く此の事を信ず。」との経言と、宿善の有無を論じないことが、いかに調和するのか、と疑問が呈される。これに対しては、聖道教、つまり自力得脱の教えとは異なり、浄土宗は「偏に弥陀の願力に乗じて」成り立つ道であることをおさえ、それゆえに浄土宗の「正意は、宿善を以て要とせず」と明確に言い切るのである。この隆寛の言葉に親鸞がふれていたかを確かめることはできないが、源空門下の先輩であった隆寛によって、ここまで明確に本願念仏の教えにおいて宿善の有無は関係なく、そこから完全に解放された形で他力の仏道の得道を明示する理解が存在していることは、注目すべきである。

以上から聖覚、隆寛は、ともに念仏の教えにおける「宿業の善悪」あるいは「宿善の有無」について究明し、「宿業」の善悪や有無は問題とならず、むしろそこにこだわる心の底にあるものは、本願念仏の教えに対する疑いあるいは不知であり、弥陀の本願を信じることができない課題性の中にその問いの質を明確化している。このような「宿業・「宿善」の意義の究明は『歎異抄』における宿業の意義と深く共鳴しつつ、師・源空からはじまる本願念仏の仏道と宿業との関わりを明らかにする思想的な系譜として位置づけることができよう。

四、『歎異抄』における「宿業」の意義

『歎異抄』第一三章は、罪悪深き者を助けるために起こされた弥陀の本願であるから悪をおそれないのは「本願ばかり」であって、そのようなものは往生できないという異義をテーマとする。この異義の問題点を指摘する次の言葉の中に、「宿業」の語が、まずあらわれる。

この条、本願をうたがふ、善悪の宿業をこゝろえざるなり。

（『定親全』第四卷言行篇1 二〇頁）

つまりこの異義の核心は、本願をうたがうこと、善悪の宿業を知らないこと、この二点であると端的に指摘する。先述した源空、聖覚と同じく本願の教えとの関わりの中で「宿業」が言及されているが、『歎異抄』は宿業について次のように展開する。

よきこゝろのおこるも宿善のもよほすゆへなり、悪事のおもはれせらるゝも悪業のはからふゆへなり。

（『定親全』第四卷言行篇1 二〇頁）

ここでは、人間における善心も悪事もすべて宿業によらないものではなく、いわば「宿業存在」としての人間のあり方が明示されている。そもそも仏教における「善悪」は、倫理道德の範疇で語られるものではなく、苦しみという結果をうみだすものを悪、苦しみを超え楽をもたらすものを善とする。同時に苦しみという結果をもたらす因は、自らの「外」ではなく、自身の「内」つまり煩惱とそれに基づく身口意の業にこそあると仏教は明らかにしてきた。そうすると、ここでの「善悪」および「宿業」は、迷い、苦しみのあり方をくり返しつづけていく人間存在との関わりの中で語られていることをまずおさえておきたい。さらに源空においては、病、寿命の長短、果報の浅深というかなり限定された具体相の中で宿業への言及がなされており、また聖覚、隆寛においては、「宿業の善悪」や「宿善の有無」が課題の中心として述べられていた。それに対し『歎異抄』が課題とするのは、「善悪の宿業」つまり人間にお

けるどのような「善悪」も「宿業」によるという人間存在のあり方そのものである。ここに『歎異抄』における宿業への視座の特徴的な点があると確かめることができる。

さらに『歎異抄』は、親鸞の「おほせ」として次のように記す。

故聖人のおほせには卯毛・羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとすべしとさふらひき。
〔定親全〕 第四卷言行篇 1 二〇頁

ここでは、どれほどわずかであつても私たちがつくる罪悪は、宿業のはたらきでないものは何一つないと述べる。先述したように『歎異抄』における宿業理解の特徴は、宿業存在としての人間のあり方を明らかにする所にあるが、それは個々の人間の現実（卯毛羊毛のさきにいるちりばかりも、つくるつみ）を徹底して見つけていく中に、「宿業存在」（宿業にあらずといふことなし）としての人間のあり方を普遍的に明らかにするものである。この『歎異抄』の言説は、『観経疏』に直接関わるものではないが、「宿業」への視座という点で『観経疏』の「宿業」理解が問いかける内容と共鳴していると考えることができ。宿業とは、そもそも現在の意識において経験、認識することのできない「宿」（過去）を問題にしている以上、現在の意識においてその限界を突きつけられる質の事柄である。さらに言えば、宿業とは、すべてのことを自らの「知」の中に納め尽くしたいという自我の執心を否定し破りつつ、不可知なる「宿業」の中で生きる自らのあり方を自覚することを迫るのである。このように人間のあり方を宿業存在として、その不可知性まで含めて、私たちに開示するはたらきを有するのが、『歎異抄』における「宿業」の意義である。さらに『歎異抄』第一三章に表現される「宿業」に関するもう一箇所の内容を考察していきたい。

願にはこりてつくらんつみも宿業のもよほすゆへなり。さればよきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまひらすればこそ、他力にてはさふらへ。
〔定親全〕 第四卷言行篇 1 一三―一四頁

ここでは、第一三章が課題とする異義に関わって、本願の教えにはこりてつくる罪もまた、宿業のもよおしによる

ものであると述べる。このことは、本願の教えにふれている者も、はかり知れない時を重ねて生死・迷いの苦をうみだし続けてきた惑・業のはたらきの中に生きる宿業存在なのであり、そこに一切の例外はないことを示唆している。その上で、宿業存在であるわれらが、この身における「善悪」とその業報への執われから解放され、そのことを通して宿業の身を引き受けつつ、ひとえに本願をみずからのより所として生きることこそ他力の仏道であると教示するのである。

このように理解すると、『歎異抄』第三章が明らかにする宿業存在としての人間の自覚とその存在を救い上げようとする本願の関わりは、『歎異抄』の後序に「つねのおほせ」として記される言葉と、相応ずるものとして理解すべきものとなる。

弥陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ

〔『定親全』第四卷言行篇1 三七頁〕

という述懐は、いまここにいる我（「一人」）にいたるまでののはかりしれない、業のはたらき、業の歴史そのものとしての「身」の自覚であるとともに、宿業存在として無数の苦しみをうみだし続け、生死の苦海に沈み込んできたわれらをこそ「たすけんとおほしめしたちける本願」への謝念そのものである。第三章における宿業の身の究明を踏まえるならば、この「つねのおほせ」は、ひるがえってわれらの身そのものを普遍的に明らかにしつつ、本願のはたらきに遇い、その道を歩むものとなれとよびかける教言そのものである。

このように『歎異抄』における宿業とは、一切衆生を斉しく同じく苦しみ、迷いのあり方から超えさせていく弥陀の本願が生きてはたらくその機の普遍的なあり方を明らかにする言葉であると確かめることができる。

おわりに

拙論の問題意識は、『歎異抄』における「宿業」は『歎異抄』以前の「宿業」理解と、いかなる連関があるのかを思想的に明確にし、『歎異抄』における「宿業」がどのように人間の存在性、課題性を明るみに出しているのかについての考察であった。このことを考えていく中で展開した拙論の内容を最後にまとめて、結びとしたい。

一、『観経疏』における宿業への言及は、韋提希における釈尊に対する問いを「宿業の因縁」への問いとして明確に位置づけるとともに、宿業への問いをどのような視座において問うのかという視座の明確化の重要性を教示するものとして究明した。

二、源空における宿業への言及は、「宿業にかぎりありて」あるいは「宿業にこたへ」ておこる病、寿命の長短や果報の深淺の相違に関わって、神仏に祈ることは「いたずら」つまり役に立たないことであると明確に示しつつ、「宿業にかぎり」ある身を生きるわれらにおいて、本願を信ずる人にはたらく「転重軽受」の仏力を教え、その身を生き抜くあり方を明示するものであった。

三、聖覚および隆寛においては、本願念仏の教えにおける「宿業の善悪」および「宿善の有無」について論じており、畢竟、「宿業の善悪」における個々の違いや「宿善の有無」を一切問うことなく、そこから解放された形で本願念仏の教えがわれらに実現する理を明らかにしていた。

四、『歎異抄』における宿業の特徴は、まず宿業存在としての人間のあり方を明らかにするところにあった。その上で、宿業存在としての人間の明確化は一切衆生を齊しく同じく苦しみ、迷いの在り方から超えさせていく弥陀の本願がはたらくその機の内実が普遍的に明らかにするものであることを論じた。

以上、宿業の思想的な意義について残された課題は少なくないが、「宿業存在」としての人間の究明は、「誓願一仏

乗」の具体性を最も鋭く問いかける人間観として、私たちに迫るものであることを改めて教えられた。親鸞が開顕する「誓願一仏乗」のいのちは、どこまで現実の衆生のすがたとその苦悩に向き合っているのか、さらには、どこまでリアルに衆生の課題の核心を抉別しながら、そこに「撰取不捨」の本願をより所にして生きることの意義とその具体性を明確化することができるかという所にあると考える。このことを聞思しつづけていくという課題を自身に確かめて、拙論を閉じたいと思う。

註

- (1) 「宿業」についての研究は多数存在するが、このような視点からの代表的な研究成果として、真宗大谷派教学研究所編『真宗の教学における宿業の問題』第一巻、第二巻（東本願寺出版部）および西田真因著『真宗宿業論』（法蔵館）をあげておきたい。
- (2) 『定親全』第三巻 書簡篇 一〇七頁
- (3) この視点での先達の究明に、安富信哉「宿業―その論理と倫理」（『真宗の教学における宿業の問題』第二巻所収）がある。
- (4) 善導は『観経疏』に「宿業」の語をもう一箇所、「定善義」勢至観において用いている。具体的には、『観経』第十一・勢至観における「有縁の衆生」という経言を、善導が「与勢志宿業有縁者」（『定親全』第九巻 加点篇3 一五五頁）と解釈している箇所である。但、ここには「宿業」の語は出るが、その意義を言及する表現がないため、拙論では取り上げていない。
- (5) 『観経疏』からの引用は、特に注記しないかぎり、専修寺蔵・親鸞加點本と伝えられる本を底本としている。『定親全』に拠る。また書き下しに際しては影印本『高田専修寺本 善導大師五部九卷』Iを参照して、送り仮名等は適宜筆者が補った。
- (6) 『真聖全』一 五〇頁 原漢文
- (7) この問題に対して、拙論では十分な検討はできなかったが、以下、先達の三つの理解を記しておく。

①証空『観門要義鈔』

我自一生已來未曾造其大罪等とは、經文に此の言無しと雖も、意を以て之を尋ねれば、既に我宿何罪と過去を尋ねれば、今生罪無しと思ふ意明らかかなり。今大罪の言を加ふることは、凡夫の小罪すら遁るべからず。故に大罪を以てこれを分別するなり。問ふて云はく、夫人父の王の言に隨ふて闇世を産みて害を為さんと欲しき。此の因縁に依りて、今害を被むる(と)思ふべし。何が故ぞ過去を尋ねて、今生の故を知らず返りて横さまに來ると思ふや。答へて云はく、二義あるべし。一には佛法、王法、其の教へ異なり。王法は後世を談せず。身を立て名を顯わすを要と爲すれば王の命に隨ふを法りと爲して、此に逆れば過を爲す。夫人既に王の命に隨ふて、産み落して殺さんとせしかども、死せざれば、これを乳養すること、更に疎そかならず。故に夫人罪無しと思ふなり。二には凡夫癡かにして因果を辨へず。罪を造りてこれを知らず。故に何の因に依りて此の苦に逢へるぞというなり。知るべし。

〔天日本佛教全書〕第五五 一七〇頁 原漢文 傍線引用者

証空は、以上の文章から、韋提希の問いは、今生に罪をつくっているにもかかわらず、そのことを自覚していない(「罪を造りてこれを知らず」) 故に、「宿業の因縁」を問うのであるという理解に立っている。

②良忠『觀經疏伝通記』

我自一生已來等とは問(う) 初には仙人を殺し次に闇世を殺さんと欲して生むとき地に墮せり。殺業尤も重し。何ぞ一生未造大罪と云わん。答(う) 仙を殺し地に墮すは即ち王の計なり。夫人は殺生の意樂を起さず。故に未造と云(う)。徑路とは廣韻に云く徑は直なり堅なりと。是れ山の直道なり。經に世尊復有何等因縁等とは、問(う) 世尊何故ぞ因縁を答えざるや。答(う) 夫人始には二人に怨み甚深しと雖もしかも終には穢を厭う。但し二人を恨るを即(ち) 厭穢の端とす。宿業を以て要とせず。是故に佛答を俟たず(して) 即(ち) 淨土を請う。佛既に穢を知る故に其答無きなり。

〔淨土宗全書〕第二卷二五八頁 原漢文

良忠は、韋提希は「殺生の意樂」を起していないから、大罪を起したことになるはず、それゆえ今世の業においてはわれなき阿闍世からの危害について「宿業の因縁」を問うのであると理解している。

③深励『觀經四帖疏講義』

「自一生已來」というは生れてより已來なり。經に我宿何罪とあり。夫れなれば韋提の心我れ生れしより大罪を造

れることなしと思うなり。此即凡女人の情なり。父王に伴うて仙人を殺すことも高樓より生み落すことも忘れて大罪は造らぬことと思うなり。大経に吉凶禍福競各作之無一怪也と吉凶に遇うは一罪のなす処なれどもそれを左
右思うものなしとなり。凡夫今日の心、実にしかなり。
〔観經四帖疏講義〕二六五頁

深励は、「仙人を殺し」「高樓より生み落す」大罪をなしているにもかかわらず、そのことを「忘れて大罪は造らぬ」と思つて、宿業の因縁を問うているのだと理解している。

(8) 『定親全』第九卷 加点篇3 五四頁 原漢文

(9) 『定親全』第九卷 加点篇3 五六頁 原漢文

(10) 『淨真全』六 四九二頁

(11) 『転重軽受』の思想的展開については以下を参照した。

神居文彰「病いの備荒―転重軽受について―」〔印度學佛教學研究〕45 (1)

小川法道「転重軽受の思想史―特に浄土教をめぐつて―」〔佛教大学大学院紀要〕(45)

(12) 『淨真全』六 六五〇頁

(13) 同右

(14) 『定親全』第六卷写伝篇2 七一頁

(15) 『隆寛律師全集』第一卷 一〇一頁・一二四頁

(16) 『隆寛律師全集』第一卷 七九頁 原漢文

(17) 書き下しにあたっては、平井正戒著『隆寛律師の浄土教附遺文集』(金沢文庫浄土宗典研究会・昭和一六年)を参照した。